

〔書評〕

馬淵 和夫 日本韻学史の研究Ⅱ

森 岡 健 二

本書は、馬淵和夫博士の「日本韻学史の研究」全三巻のうち第二巻である。「日本韻学史の研究」は、全体が五篇に分けられていて、第一巻（B五判、七―三頁、昭和三七年三月発行）には、

第一篇 日本韻学史概論

が収められ、本書、すなわち第二巻（B五判、四六―九頁、昭和三八年三月発行）には、

第二篇 韻学史上重要な問題

第三篇 韻学と国語学史との関係

第四篇 韻学史料よりみた国語史上の問題

が収められている。そして、第三巻は、未刊（昭和四〇年三月発行予定）で、

第五篇 日本韻学書籍集録（悉曇篇）

が収められる予定である。

第一巻「日本韻学史概論」については、すでに本誌五二号に佐藤喜代治氏の書評があるが、実はわたしも「言語と文芸」第三二二号に書評の機会を与えられた。そして、その書評の冒頭に、

この大版七〇〇ページに及ぶ論述を熟読吟味し、今、改めて自分はその任でないことを痛感しつつも、この機会を与えられたこ

とを幸福に思う。研究における構想の雄大さ、論証の卓抜さ、原典解読の緻密さに、書評の義務を忘れて、ひたすらに敬服し、啓発され、青年のごとく学問的興奮を禁じ得ない状態だからである。

と書いたが、このことを、ここにそのまま繰り返す必要を感じるとともに、これによって、氏の日本韻学史に関する研究篇の出版が完成したことを心から祝福したいと思う。結局、細かい議論に関して、わたしの手の届かないことが少なくないが、青年のような感激をもって、再びこの書に立ち向かうことのできる幸福を感じるが故に、あえてこの書評をお引き受けする次第である。

一、学史編纂の態度

さて、第二巻の個々の問題に入るに先立って、わたしは全体として馬淵博士の韻学史編纂の態度について一言しておきたい。第一巻を読んだ際、わたしは心からの敬意を表しつつも、まず「日本韻学史とは何か」ということに大きな疑問を感じ、これは第二篇以下を読むことによって解決するかもしれないという意味のことをのべたが、卒直にいつて第二巻を読んでもこの疑問は解決しなかった。こ

の原因は、第一に著者の興味がインド・中国・日本の音韻史ならびに音韻論史の多方面にわたり、記述に際してそれらが混然としていること、第二に学史の展開、つまり学説の歴史的な流れを記述することより、個々の文献や問題の註解や考証に力を注ごうとするのと、第三に第一、二、三の各篇で韻学史の問題が重なり合い部立てが整理されていないことにあると思われる。

第一の問題についていうと、著者の「日本韻学史」研究の構想が、余りに雄大であるところに原因があるのであるが、日本への将来音への系譜をめぐってインド・中国の音価の推定がなされるかと思うと、インド・中国の音韻論上の概念が議論され、さらに日本人韻学者の伝記、諸本、学説が検討される。インド・中国の音価の推定も、その音韻論の研究も、それが「日本韻学史」に関係する限りでは、もちろん必要であるが、それらが余りにも重要視されてひとつの主題としての独立性を帯びてくると問題がある。ひとつの研究の中に、インド・中国の音韻史、その音韻論史、および日本の音韻論史、音韻史が雑居しているという印象を与えるからである。もちろん、いずれも未開拓の領域で、重要な問題にはちがいないが、「日本韻学史」の名のもとに、これらが混然と同居していると、改めて「日本韻学史とは何か」という、たいへん素朴な疑問が生じてこようというものである。

第二に、学史の記述として、歴史的な展望に欠けているように思う。個々の文献や学説を中心に、それぞれの話題、特に音価や韻学上の概念に対してはおどろくほどエネルギーな論証が施されるが、それぞれの関連や歴史的な展開については、比較的に手薄である。極端な言い方を許されるとすれば、書目解題、音価推定、

概念の注解、音韻資料がそれぞれ独立して並んでいる観がないでもない。学問の変遷に主眼を置くよりも時代順に配列した文献にあらわれる個々の問題について議論をするという方法であるから、問題は多岐にわたるが、歴史的な見透しがわるくなるのである。もちろん、これは学史編纂の態度かつ学風の問題であって、ひとつひとつの論証は独創的かつ貴重なものであって、いささかもその価値を損するものではないが、全体として韻学史の展開を、この書から把握しにくいことは確かである。

第三は、前の学史編纂の態度と関連するが、第一、二、三篇の部立てが、必ずしも整然としていないということである。たとえ、われわれは、第一篇「韻学史概論」をひもときながら、常に、第二篇以下にまとめられた問題（音図、反切、相通など）を合わせ読まなければ、日本韻学史の概観ができないし、また、ある学者たとえば明覚の業績を知ろうと思えば、第一、二、三篇の各篇からそれぞれの該当項目を捜さなければならぬ。音図、反切、相通などの韻学史の重要課題が大部分第一篇からはずされているかと思うと、各韻学者あるいは委音、半音、音便などは各所に分散して議論されるという工合で、本書の部立ての順序に従って読んでも、韻学史の流れを整理して受け取れることは、およそ困難である。

韻学史の重要な課題を、ひとつひとつ驚くべき膨大な資料によって論考を加えるという方法論をもってすれば、どうしても徹視的な問題への照明が主になって、巨視的な立場が失われることは、ある程度やむをえないが、韻学史に関する唯一の画期的な大事業であるだけに、以上の点が特に惜しまれるのである。

二、第二巻の構成

第二巻は、前述のごとく第二、三篇を含み、問題が多岐にわたるので、まず、その内容目次を紹介すると、次のとおりである。

第一篇韻学史上的重要な問題の研究

第一章『大般涅槃經』の「十四音」について 一頁

第二章『悉曇字記』の「余国音」について 一頁

第三章対注漢字よりみた梵語および中国語の音韻に ついて 二四頁

第四章連声と音便

第五章日本における反切法の歴史 一五〇—一九一頁

第二篇韻学と国語学史との関係

第一章五十音図の研究 一頁

第二章相通説について 一三一頁

第三章漢音呉音について 一六〇—一八二頁

第三篇韻学史よりみた国語史上の問題

第一章上代才音の変遷 一頁

第二章上代中古におけるサ行頭音の音価 一四頁

第三章中古タ行頭音の音価について 二七頁

第四章平安末期の母音 三五頁

第五章「いろはうた」のアクセント 四八頁

第六章高野山親王院蔵『惠信僧都義読』付載『仮名の声』について 六三頁

第七章候体の抄物

六九—八一頁

右の項目をみてわかるように、第二巻、すなわち、第一、三、四篇

の組み立ては、それぞれ独立する論文を集め、それらを三篇に分類したもので、各篇ごとに独立した体系をもっているわけではない。ページ数の示すとおり、大きささまざまなトピックについて、論考を加えたものである。

「日本韻学史の研究」全体からみると、第一篇の「日本韻学史概論」と、この第二、三、四篇との関係は、いささか不明確である。第一篇が総論で、第二篇以下が各論かというところ、そうでもない。第二篇以下は、適宜な話題についての論文集であって、総論に對する各論的な性格をもっていないからである。また、第一篇が「日本韻学史」の中心で正論文であり、第二篇以下がその副産物としての副論文かというところ、必ずしもそうとは考えられない。というのは、日本韻学史上無視することのできないと思われる「連声」「反切」「相通」「五十音図」が第一篇の概論からはほとんどはずされ、第二篇以下にまとめられているからである。要するに、第一篇だけで独立せず、第二、三、四篇と合わせて日本韻学史の全貌が見渡せるようになっていて、しかも第一篇は列伝体の記述、第二篇以下はそれぞれ独立した論文集というように編纂の態度が異なるため、両者の関係がはなはだわかりにくくなるのである。「言語と文芸」の書評にも書いたことであるが、音便、反切、相通、拗音、五十音図などの日本的な音韻理論を、「日本韻学史」全体の中にどう位置づけておられるのか、氏の説明をきかせてほしいものである。次に、第二篇の内部、つまり第二、三、四篇のそれぞれの関係についても、同じように了解しにくい点がある。

たとえば、第二篇の第二章「余国音」、第三章「梵語および中国語の音韻」の研究は、悉曇史料を用いたインド・中国の音韻史であ

つて、第四篇の「韻学史料よりみた国語史上の問題」と同様、学史ではなく言語史である。また、同じく第二篇の第四章「連声と音便」、第五項「反切法の歴史」は、ともにその起源は外国かもしれないが、その中味は非常に日本的で第三篇の「五十音」や「相通」の研究と区別すべき必然性はない。インド・中国の音韻や音韻論の研究が韻学であったとしても、少くとも明覚以後は、日本音を基底においた反切、相通、五十音図のような説明原理を創造して、外国音の研究をしたと思われる。その点、わたしは、明覚以後の日本の音韻理論を国語学史に含めるべきだと思ふものであって、本書のような分類原理が、何にもとづくのか、よくわからない。

以上のことは、結局、前にのべた「韻学とは何か」ということについて、わたしの理解の不足からきているのであろうが、第二篇以下の分類法が、いっそう「韻学」の性質について、わたしに疑問を抱かせることは確かである。

三、「五十音図」の研究をめぐって

以上、本書の全体的な問題にこだわってしまったが、これは、わたしが、古代インドから古代中国へ、さらに日本はもとよりフランス・ドイツに及ぶ博士の該博な知識に翻弄されて、未知の問題を理解することだけに迫られ、ついに全体の筋道を見失ったことに原因があるのかもしれない。それほど、ひとつひとつの論考は用意周到であり、証明は徹底しており、規模雄大である。たとえば、第二篇第四章「連声と音便」における資料搜索および第三篇第一章「五十音図の研究」における新資料の発掘は、驚異に値するもので、これらは本書中の圧巻といえる。そのほか、大小の各論文にしても、豊

富な資料の駆使と、その徹底した解析によって議論を絢爛と展開するため、わたしなどは、資料に目を奪われて、どうしても大綱を見失いがちになる。

とにかく、第二巻に収められた論文も、インド・中国の音韻論、音韻史から、日本の音韻論音韻史におよび、この全体にわたって私見をのべることは、わたしにはできそうもない。したがって、ここでは、勝手ながら、本書の中軸をなすと思われる五十音図の研究を主にして、それと関連する反切、相通、連声についての諸研究を問題にすることにしたい。

1. 五十音図の成立

第三篇第一章「五十音図の研究」では、まず第一節でその成立に関する諸説を批判し、次に第二節で自説をかかげている。五十音図の成立に関する諸説としては、大矢透、橋本進吉、山田孝雄、小西甚一の各説を出し、そのいずれに対しても批判的であるが、論の進め方としては、橋本・山田説と同じ基盤に立つと認められる佐藤喜代治氏の小西説批判をとりあげ、その評価をめぐって、小西説はもとより佐藤説の批判を行っている。そのため、結果的には佐藤氏の論を借り、あるいはそれを補強することによって小西説に対する完膚なきまでの批判にはなっているが、佐藤説つまり橋本山田説に対する批判としては徹底性を欠いたものになっている。小西説はもともとアイディアとしてはおもしろいが、実証性のない強引な仮説にほかならないのであるから、批判の矛先は、むしろ橋本山田説、特に、音図が漢字反切のために用いられたことを認めながらも、なおかつ「国語の音韻組織の知識にもとずいて、それらの経緯の関係を図表として示したものであって日本人の創意にでたものとおもわれ

る」となす山田説に向けるべきではなかったかと思う。山田説に批判的でありながら、真正面から反論を論理的に展開されなかったことは残念に思う。というのは、五十音図の成立に関する著者の考えが、帰するところは山田博士の暗示したところと似てくるからである。

つまり、著者自身の成立論を結論的にいえば、音図は悉曇から出たものでもなければ、漢字反切のために生じたものでもなく、五音相通の意識と結びついて国語音を韻紐図によって整理したものだということである。

証拠としては、日本に古代から普通の意識が存在し、それが中国音韻学の影響を受けて韻と声の認識に進んだこと、最古の音図、醍醐三宝院の「孔雀経音義」の図が、反切の図というよりハワ二行の交替など漢字音の整理という性格を含んでいること、また、相通観は、悉曇学にはなく、明覚の図におけること、国語四十七音の経緯の関係を摩多体文によって考察したもので、あくまで国語音に関するものであることなどである。

この五十音図の成立論は、これまでの諸説に対し、新たに一説を加えたようにも見えるが、その説き方は異なるにせよ「国語の音韻組織の知識にもとずいて、それらの経緯の関係を図表としてしめしたものであって日本人の創意にでたとおもわれる」という山田説と基盤が等しいように思われる。

一体、五十音図の五十音図たる所以は、明覚などが「三朝の言は一言にして、いまだこの五十字をいせず」といったとしても、結局はそれが国語音の図表であること、そして、それが韻と声とを経緯関係で組み合わせたものであるということである。もし、国語音と

いうことと、経緯の図表ということとの、二つの条件を満たさなければ、五十音図たり得ないことはいうまでもない。

したがって、五十音図の成立論は、このような国語音の経緯の図表が、いかなる事情で作製されたかを論ずべきものであって、そのため、従来の説も、悉曇字母表に摸して国語の字母表を作るためだったとか、漢字反切の便法として作られたとかいうような議論になるのである。漢字反切のために音図が役立つのも、それが経緯の図表だからであって、このような経緯の図表が何のために作製されたかを論じなければ成立論にはならないように思う。馬淵氏は、明覚の音図を例にとり、それが国語音であることや、経緯の図表であることを懇切に証明しておられるが、それは五十音図たる条件を強調するだけで、成立論とは無関係のように思われる。むしろ、氏の成立に関する考え方としては、

明覚のといった方法は、国語四十七音に存在する経緯の関係を、悉曇の摩多体によって考察したものであって（九二一頁）とか、

日本語音節の音韻組織は中国語よりずっと簡単なのだから、これを全部一図にまとめることは中国語のばあいよりはずっと簡単であった。そしてまた、一言語の音韻図としては悉曇字母表をもっていたのであるから、これに摸して雙声、疊韻の図を音図にまでつくりあげることが当然かんがえられるところであった。これが音図の成立である。（二〇四三頁）

とかの表現にあらわれており、これらは、氏が結論とされるころとは別の結果になっているように思う。つまり、氏の考えを、動機によって分類すれば、悉曇の字母表に摸するという点で悉曇摸倣説

になり、何のためにという目的によって分類すれば、字母表を作るという点で字母表作製説になりそうである。そして、これらの字母表を作製するまでの準備態勢として、古代日本に音韻交替現象についての認識があり、それが韻と声の抽出にまで進んできたというのは、音図成立の地盤の問題であって、これは山田博士のすでに暗示されたところと一致する。

一体、馬淵博士の説は「相通」という用語にまぎらわしい要素があつて、そのことは、あとでのべるつもりであるが、もし、氏が相通起源説を唱えようとするのなら、古代日本に音韻交替現象についての認識があつたという地盤の問題でなく、字母表作製のためや、漢字反切のためよりは、むしろ相通の理を説くための説明原理として五十音図を作らなければならなかつた積極的な理由をのべなければならぬと思う。その点「孔雀経音義」や「金光明最勝王経音義」の音図の解釈に創見はみえるが、相通の理を説くために音図が作製されたことの積極的な証拠にはなっていない。

要するに、著者の音図成立論は、音図成立の直接の動機ではなく、山田博士が暗示するにとどまってそれほど実証的にはのべられなかつた成立の地盤の問題を深く掘り下げようとしたところに功績があると思う。

それにしても、音図成立論を精読して改めて感ずることは、いかなる説といえども推定の域を出ず、これといった実証可能な論拠がみつからないということである。ただ、音図の起源は知らず、明覚の音図（以後のもの）が、氏も指摘されるように悉曇の影響下にあることは確実だといえよう。

2、五十音図の変遷

「五十音図の研究」の第三節以下は、箇々の音図についての解説と解題である。

これらの解説と解題をとおして言えることは、五十音図が大体、時代順に配列してあるとはいへ、それぞれの音図に関する適宜の話題を論ずるのみで、音図相互の関連や展開についての見透しが手薄だということである。このことは、前にものべたとおり著者の学風だと思ふが、五十音図の資料集にはなつても歴史になつていないことを残念に思う。

たとえば、第三節「金光明最勝王経音義」では主として「清濁」の注記を、第四節「悉曇要集記」では「同韻」「同音」「通韻」を、第五節「明覚と音図」では「反切法」と「委音」を、第六節「兼朝の音図観」では明覚への反論としての「半音」を、第七節「東禅院の音図観」では「音注」と「かな反し」を、第八節「中世の音図」では、承澄に関して音の「所生次第」と「相通」、信範に関して「十四音説」、了尊に関して「十界配当」と「音図観」を、といった工合である。いずれも、それぞれの音図に関する限りでは重要な適切な話題にはちがいがいないが、互いに関連し展開していく過程を押えることもできるのであるから、もつと歴史的な視野から扱ってほしかったと思う。たとえば、明覚を音図展開の起点に立つ人として、その音図の種類、性格、文字、表記、配列、反切、相通、委音音図観の全面に触れ、その後の音図をそれとの関連においてとらえることもひとつの方法だと思ふし、あるいは、大矢、山田両博士がしておられるように、文字、表記、配列、用途、影響関係から観察するのもよい方法だと思ふ。ともかくも、個々の音図の解説をするのが目的であるとしても、歴史的な展開という全体の中に位置づけ

ないで、断片的に話題をとりあげても、音図の性格を理解することがむずかしいと思う。

次に、第十節「中世出現の音図」は、前にものべたように、中世の音図の新資料が多数集められていて、圧巻である。氏の徹底した資料捜索の努力に、心からの敬意を表するとともに、感謝したいと思う。ただ、写真版が小さくて、不鮮明なものが少からずあるのは、資料集であるだけに惜しまれる。

3、日本における反切法の歴史

「反切法の歴史」が、第二篇「韻学史上重要な問題」に含められていて、五十音図や相通から切り離されているのは、前にものべたごとく納得がいけない。第一節「平安初期の反切法」では、文鏡秘府論の紐声雙声の反音をあげ、その具体的な意味を安然の「悉曇藏」によって解き明かす。その解析は、まことに明解で、不案内なわたしにも、その論旨には、十分な理解をもって納得させられる。

次に、第二節「明覚の反切法」では「反音作法」における反切の事例を悉くあげて、その方法を説明し、さらに「委音」の性格を論じて、それが単音であることを証明される。その解釈は、懇切丁寧であり、かつ正当であって、おおむね賛意を表するものであるが、ただ「委音」のうち、キエ、シエ、チエというイ系列の委音まで単音と解し得るかどうか疑問に思う。

次に、第三節「中世における反切法」は、わずか五頁で、明覚の発明した反切法がこれによってどう展開したかをうかがう術がない。

ここでも、氏の歴史的方法に一言したくなるが、第一、二、三節が、それぞれの問題を個々に扱っているのみで、反切の歴史的展開

が描けていない。

実をいえば、わたしは昨年「日本韻学史の研究」の第一巻を読んで刺激を受け、「音図による反切法の展開」（国語学研究4）という小論をものにしたが、そこでは、明覚を起点とする兼朝心蓮承澄という系譜の中で、音図音注の方法、アヤワ三行の意識、拗音の認識反切の方法が、どう変遷、展開したかを扱った。この小論は、直接馬淵説への反論という形式はとらなかったが、同氏の兼朝に対する解釈の訂正の意図をこめたもので、同時に「日本における反切法の歴史」に対する批判にもなっているかと思うので、ここに書き添えておく。このような小論をまとめる動機をつくってもらった学恩に對し、心からの感謝をここに捧げることにする。

4、相通説について

「相通説について」の研究は、同じく五十音図に関係するが、著者の場合は、特にその成立論に関するものだけに重要である。その所論は、相通説の起源は悉曇字にはなく、日本人の音韻観にあったという点で、例によって多くの例証を出しておられるが、その論に関する限り、当を得たもので、ならぬ異論を挿む余地がない。

ただ、わたしは、この章のキーワードとなっている「相通」とか「五音」とかの用語の使用に、ひっかかりを感じるものである。たとえば、著者は「相通説があって五十音図が生じたかもしれない」というようなことを言われるが、どう考えても、「相通」とか「相通説」とかは、五十音図あるいはそれに類するものにもつづいた概念のように思う。確かに、古代人はメヅラとマツラのような音の交替現象を地名起源などに利用しているが、果してこれがメとマ、ツとツというような一音一音を抽出した上での認識なのか、「めづ

ら」「まつら」という語全体の対応現象の認識なのかもはっきりしない。また歌経標式などでは確かに同韻の意識は認められるが、これをもって直ちに「相通」の認識が生じたとはいえそうもない。相通観が成立するためには、個々の音の交替現象や同韻、同音の知識だけでは不可能で、その背後に五十音のような音の経緯を整理した説明原理が必要であったと思われる。その点、「日本紀私記」の「マソミ」と「マヌミ」のソとヌを「相通」とする語釈が問題になるが、これは資料としての信憑性が疑わしいのであるから、これをもって音図以前に相通観があったとはいえそうにない。

要するに、五十音図成立以前の音の交替現象の意識に対して「相通」の名を冠するのは、相通起源説を称えるためには便利かもしれないが、議論を徒らにまぎらわしくするもののように思う。

なお、右のことは、「五音」という語の用法についてもいえる。たとえば、

同韻の音を一群とすることによりさらに考察がすすみ、同頭音すなわち同声の音を一群とするところまで発展する。ここに「五音」という概念が発生する。この「五音」をひとつの図にまとめようという方向にすすむ。(一〇四二頁)

のような表現があるが、「五音」という概念は、どう考えても、ひとつの声(ひとつの同声音の群)の認識だけからは生ぜず、他の声の群との異同から相対的に生じてくると思われる。つまり、同じ子音を含む音の一群をまず意識し、次に他の子音を含む音の一群を意識するというような過程をとるのでなく、五音の認識が生じたとき

背後にすでに音図が存在していたと思うものであって、五音の意識が五十音図を生んだという推定には、用語上の矛盾を感じる。事実、文献をみても、五音という用語は、五十音図と同義に使われ、特定の行だけでなく、音図全体を指していると思われる。

結局は、用語の問題であって、議論の意図がわからないのではないが、博士の考えている因果関係が、用語のために混乱しているように思う。受け取り方によっては、五十音図以後に生じた概念をもって、五十音図の発生の原因だと強調しているというような誤解も生じそうである。

5、連声と音便

第二篇第四章「連声と音便」は五十音図に直接関係しないが、国語学史の問題でもあるし、また本書中で最も力の入った論文でもあるので最後に触れておく。

「連声」については、まず、江戸時代の「悉曇連声集」から始めて、次に室町時代に、東寺の二種連声と山門の四種連声のあることを指摘し、広く文献を渉猟して両者の関係を論ずる。この間の資料の活用は、氏の学風の面目を遺憾なく發揮していて、およそ徹底したものである。

次は、中近世の連声理論から、中世前期、平安時代へと、倒叙的に連声の歴史をのべ、さらにインドのサンディとの関係にまで論及する。その構想の雄大にして、規模の宏大なることはおどろくほどで、わたしは、ただ教えられることのみ多く、私見を挟む余地がない。

ただ、第十節「国語研究史上の声連と音便」では、ほとんど「連声」と「音便」の語の用法に終始して、実質的な認識の発展に

は触れていない。わたしのみるところ、明覚の連声論は、連声の名において、国語の音便現象を精細に整理しているのであって、それは、国語学史の画期的な業績である。その点、用語の問題に終らず悉曇学を契機として、国語の連声音便の実質的な認識がどう進展したかについて、独自のエネルギーな考察を加えてほしかったと思う。

おわりに

以上、人跡未踏の天地に、見事に日本韻学史を建立された、この大きな業績に対して、わたしは、いささか失礼な言辞を弄しすぎたかもしれない。しかし、わたしの指摘した以上の諸点は、少しも本研究の価値を減ずるものとは思わない。なぜなら、わたしは、五十音図にもとづく貧弱な学問史観から、この膨大な研究のほんの一部を垣間見たにすぎず、それが、しつぽをつかんで象を論じるのに似ていることを、わたし自身が何よりもよく知っているからである。とにかく、第一巻のときもそうであったが、第二巻を読んで、わたしは心地よい学問的興奮を覚えていた。本書によって教えられた多くのことに心から感謝したいと思う。